

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5 Tel/Fax 03-3985-4081

目次

1～3ページ …… 『赤い鳥』で再会 2 ～海達公子～

文化の保存と創造 熊本県荒尾市「海達公子まつり」取材

4ページ …… 旧宣教師館四季の彩り

イベントお知らせ・春のガーデンコンサート

『赤い鳥』で再会 2

海達公子さんという方をご存知ですか？
大正13年に7才で初めて『赤い鳥』に自作の児童自由詩が掲載され、その後も多数の作品を投稿し採用されました。存命中は幼く



かいたつきみこ

海達公子

して日本全国に名前が知れ渡りましたが、現在も知る人は少ないと思います。前号の当館たよりの岡本太郎に引き続き、『赤い鳥』の隠れた有名人を掘り起こします。

豊島区ゆかりの童話・童謡雑誌『赤い鳥』は、大正7年に創刊し、主宰者・鈴木三重吉の死によって昭和11年(1936)10月号で終刊を迎えたが、その間、創刊号の巻頭ページで三重吉が宣言している「赤い鳥」の標榜語(モットー)にあるように、世俗的や俗悪なものでない芸術的な読み物をお子達に与え続けた。教育的見地を伴ったこの主張から、『赤い鳥』では一般の子供や大人から広く作品を公募し、綴り方は鈴木三重吉が、童謡・自由詩は北原白秋がそれぞれ選評し、優秀な作品は『赤い鳥』紙上に掲載するという活動も行っていた。これが日本中の子供からだけでなく、教育熱心な教員や大人の絶大な支持を受ける要素となった。中には度々掲載されることで、文化人の一員のように扱われた子供もいた。今回はその一人として、熊本県荒尾市の“海達公子”を取り上げる。

海達公子は大正5年(1916)8月23日に海達松一・マツエ夫婦の長女として生まれた。両親は徳島県の行商が盛んな村の出身で、各地を歩いて生活したようだが、炭鉱景気にわく熊本県荒尾に移り住んだ。現在はのどかな住宅地が広がるが、国の重要文化財で世界遺産登録を目指している万田坑(三井石炭鉱業三池炭鉱旧万田坑施設)が残っていることから、当時の様子がしのばれる。炭鉱の町として栄える荒尾で、公子は生涯のほとんどを過ごした。



(写真1) 荒尾第二小学校(現在廃校)の海達公子像。地元有志によって建てられた。



(写真 2)



(写真 3)



(写真 4)

(写真 2) 四山神社にある詩碑「夕日」

(写真 3) 詩碑「夕日」の設置場所から有明海を望む。

(写真 4) 三井石炭鉱業三池炭鉱旧万田坑施設。平成 12 年 1 月 19 日に国の重要文化財に指定。

政治の中心地である東京と、地方都市との差は今より大きかった時代である。経済的に右肩上がりの成長を成していたとは言え、危険と隣り合わせの炭鉱産業の持つ独特の雰囲気もあったであろう。公子の成長の背景には、時代や地方の特性がほの見える。

公子の父・松一は簿記学校に学び、一時は三池炭鉱で勤めるなどしたが、文士志望で定職に就かないことが多かったようである。松一自身にもある程度は才能があったらしく、ペンネームを貴文（よしふみ）とし、『赤い鳥』の大人の部に童謡詩が度々掲載されている。公子の児童自由詩づくりはそんな父親の指導による。

大正 12 年（1923）、公子が荒尾北尋常小学校（現・荒尾第二小学校）に上がると父の指導が始まった。松一は子供向け雑誌を公子に読ませ、反応を見て、徐々に作詩活動に導いた。その際に自然観察をじっくりとさせることを重視した^(註1)。『赤い鳥』では大正 13 年（1924）7 月号に公子の児童自由詩「ひし」が初めて掲載され、以後、昭和 6 年（1931）4 月号まで詩を中心に 100 篇ほどの作品が掲載された。断トツの入選作品数である。白秋も才能を育てようと、時に厳しく、丁寧かつ慎重な態度で公子の作品を評したのが講評から伺える。公子の作品がどのように受止められたかは、大正 14 年（1925）に若山牧水夫妻の訪問を受け、昭和 5 年（1930）には九州を訪れた白秋のために開かれた囲む会に、父と共に参加したことからわかる。“ちょっと詩のうまい子供”には有り得ない待遇である。海達公子の名は当時の文学青年にまで知れ渡っていた。

父の指導の功績は大きいですが、そもそも公子には父の指導に応えられる素質があったのであろう。学校の成績も非常に優秀であった。しかし父は時に行き過ぎと言える指導をすることもあったようである。公子の投稿詩が一度に 500 篇にも上った時、あまりの多作に北原白秋は公子の才能の芽がむしろ摘まれるのを心配し、父・松一を諷める文章を講評に書き添えている^(註2)。また、現存する公子の日記に、作詩をさぼった為に父親から暴力を受けたとの記述がある。

海達家の生活も年を追う毎に変化する。公子が幼い頃は比較的裕福な生活だったが、父の無収入や不況もあり、貧困化する。

『赤い鳥』を支持し購読したのは、恵まれた都市部の中産階級以上の家庭が多かった。それに対し、投稿し、採用される作品の中には、地方の困窮家庭（当時として珍しいものではないのであろうが）の子供の作品も少なくなかった。例えば、片親しかいない子供の父親が亡くなり、引き取り手の無い中で途方に暮れていると、親戚の一人に助け出された話や^(註3)、兄弟が多く貧しい中、ようやく学校で履くズックを買ってもらうが、他の兄弟からの僻みがあり、やむなく返品した話^(註4)などが綴り方で掲載されている。岡本太郎の母・かの子が、芸術至上主義であるが故、子である太郎に『赤い鳥』を読むよう言いつけたというエピソードは、当時の豊かで知的な都会の家庭の子供を取り巻く生活状況を示している半面^(註5)、子供の投稿作品からはより多層的な、厳しい生育環境に置かれた子供の生活





(写真5)



(写真6)

(写真5) JR 荒尾駅前の詩碑「汽車の音」

(写真6) JR 荒尾駅、左手に詩碑と地図がある。



(写真7) 荒尾駅に掲示してある詩碑の設置場所の地図・最新版。私有地近くで判りづらい詩碑もあるので、「海達公子まつり」のウォークラリーを利用しまわるのも一法である。

を読み取ることが出来る。

海達公子も、長じては後者の側に近い生活状況となる。不安定な家庭環境のまま、高校を卒業すると同時に急な病で亡くなる。昭和8年3月26日、16歳の早すぎる死であった。後には5,000篇の詩と300首の短歌が残された。しかし、膨大な作品群から、『赤い鳥』掲載作品だけを確認しても、生活の苦難を感じさせる作品は見当たらない。想像の域を出ないが、生来の性格が穏やかでのんびり屋だったのに加え^(注1)、作詩に負の感情を注ぐことで昇華するという発想が無かったのかもしれない。鈴木三重吉や北原白秋が求めたままの子供の純粋でみずみずしい感性の作品群には陰が無く、死の直前の生活を考えてと切ない印象を受ける。亡くなる2年ほど前から児童自由詩を“卒業”し、短歌づくりに傾いており、成長に伴う新たな展開が有り得たことが考えられるだけに惜まれる。

(文責：白田)

参考文献

(注1) 規工川佑輔『評伝 海達公子「赤い鳥」の少女詩人』、熊本日日新聞社、2004年

(注2) 北原白秋『童謡と自由詩について』、『赤い鳥』第14巻第5号、赤い鳥社、大正14年、P.143

(注3) 遠山盛夫(岐阜県恵那郡長島小学校卒6年)「父の死」、『赤い鳥』第12巻第2号、赤い鳥社、大正13年2月、PP.90-91

(注4) 佐倉葉子(秋田県北秋田郡大館女子小学校高1)「ズック靴」、『赤い鳥』復刊第3巻第5号、赤い鳥社、昭和7年5月、PP.83-87

(注5) 岡本太郎『「人生雑感」私の読書』、『岡本太郎著作集 7』株式会社講談社、1980



(写真8)



(写真9)

文化の保存と創造 熊本県荒尾市「海達公子まつり」取材

熊本県荒尾市では市民と商工会が中心となり、荒尾市出身の文化人として海達公子さんを顕彰している。主な活動は詩碑の建立と、命日の3月26日を最終日に一週間行われる「海達公子まつり」の開催である。詩碑の建立資金は市民からの寄付を主体としており、出資者の要望と顕彰会の検討を経て、完成度が高い詩を作詩に関連がある土地に設置しているとのことである。詩碑には出資者が記念する個人的な思いも彫られている。お祭りは海達公子の直筆の図画、習字などの展示、海達公子の残した作品群に倣い小中学生の詩・習字・絵の公募展、詩碑を巡るウォークラリーなどである。最終日に集う会が行われ、観光客の集客よりは地元住民の文化活動とリクリエーションの場となっている。公募展と海達公子作品展示を拝見した。ちょうど入賞者に表彰を行っている最中で、子供達が嬉しそうに記念撮影をしたり、他の子供の作品を真剣に読む姿があった。現在、公募展は市内の小中学生の応募が多いが、会の活動を広めるため、特に在住地の規定はしていないようである。作品のレベルも高く、荒尾を中心に再び詩人が出ることを夢想させられた。

問合せ：一般社団法人海達公子顕彰会（荒尾商工会議所内）、TEL 0968-62-1128



(写真10)

(写真8) 海達公子作品展示会場、2012年3月21日。

(写真9) 海達公子作「紅牡丹」高女4年

(写真10) 式典会場、公募展入賞者の作品に見入る。



旧宣教師館 冬から春へ



今年の冬は記録的寒さで、関東や他の地方では梅の開花が20日ほど遅れていたそうです。旧宣教師館でも3月末で梅が花盛りとなりましたので、やはり遅れていますね。桜のつぼみはまだ固いですが、日に日に膨らんできています。開花が気になる方はお出かけ前に、電話でお問い合わせください。今後のイベント予定をお知らせいたします。

● 春のガーデンコンサート

5月13日（日曜） 14:00～16:00 会場は前庭

● 『赤い鳥』を語り継ぐおばあちゃんのおはなし会

毎月第1土曜日 14:00～15:00 会場は当館児童図書コーナー
両イベントとも参加費無料です。詳細は、豊島区立郷土資料館 HP
(<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/>)、あるいは
広報としまをご覧ください。

編集後記

今回取り上げました海達公子さんと、荒尾市の顕彰会の取り組みを取材するため、昨年7月、今年の3月と、一般社団法人海達公子顕彰会の代表・松山厚志氏と北本妙子氏のお手を煩わせました。ここに謝辞として記させていただきます。東京から発信された『赤い鳥』という種が地方でどのように芽吹き、今も大事にされているかを知る作業はとて面白く、また掲載されている当時の子供達の作品から滲み出る時代背景は、今日の子供を取り巻く環境を考える上で、何かを教えてくれるような気がします。（白田）